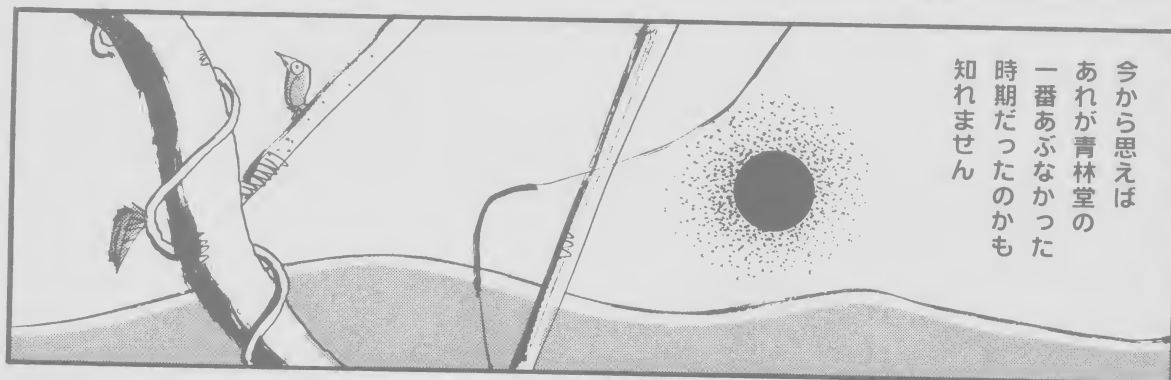
山頂の空

TAKE. 1

流れ星通信工房
三橋乙揶

沈痛な
おももちで
すれちがった
あの時の
長井さんの
顔が
こんにちわ
おひさしぶり
です！
あっあっ
こんにちわ

いやな気持
となって
心にのこって
います
……

今から思えば
あれが青林堂の
一番あぶなかった
時期だったのかも
知れません

何年か前
山中さんが
青林堂の
社長さんに
なって
僕は又
ガロに描ける
ように
なりま
した

残念なのは
長井さんと
そんな
一方通行の
関係しか
もてないまま
なくなられて
しまった
事です

とはいえ
「おもしろいものを
描くしかないんだ」
という事を

僕は
長井さんから
学んだような
気がします
……

終　1996. 2. 12

ありがとう長井さん

村野守美

小社刊「だめ鬼」より

方々の語り記す、長井さんとの交流、親交のあれこれを今になって知るにつけ、羨ましい限りです。共に風呂に入り、飯を喰い、宿をして、談論風発、語り合ってこそ、今日の大作家群が輩出成したのかと思われます。せめて生の画稿を見て頂き、その評するところを伺いたかった。そのことがあれば、長井さんの異能ぶりも偲ばれたことでしょう。接した者だけができる後の人々への長井イズムと有様を伝道できないのを残念に思います。過る日、青林堂はボクのつたない作品を六冊も上等な単行本にまとめて頂き、雑誌で掲載した短編の数々を、「ガロ」に載録をしてもらいました。その中の幾つかで、長井さんから、「いいね、こういうの、もっと描きなさいよ」と電話でエール。ボクは嬉しくなって、三日ぐらいニヤニヤして、とても幸福な日々を送りました。めったに誉められたことのない者にとって、お誉めの御褒美がどれほど励ましになったことか……。以来心のどこかで長井さんだけはボクの作品を認めてくれると勝手に確信を持ち、よりどころの支えにしてきました。その巨きな方は、もう逝かれてしまわれました。ボクはひどくがっかりして、惜別の言葉が文字になりません。

長井 勝一さま　ありがとうございました

御冥福を祈ります

長井さんの酒

佐々木マキ

長井さんには、ずいぶん世話になりました。心から、ありがとうございましたと言いたい。
それから、ぼくのことを友人――年下の友人として、ずっと扱ってくれたことにも感謝しています。
長井さんと酒を飲むのが愉しみでした。長井さんの酒は、ものしずかだけれど快活で、さっぱりしているけれど、どこかしみじみとした、いい酒でした。
長井さんは話上手で、飲みながら、おもしろい体験談をいろいろと聞かせてくれました。聞いているときは、ただおもしろいだけで、あとで思い返すと、はて人間とは何だろうと考えてしまうような、そういう話でした。
もう長井さんのような人物に出会うことはないでしょう。とても寂しいです。

キラキラと輝いて

肥後十三子

私は学生の頃に『カムイ伝』を夢中になって読んだマンガ世代で、その頃の長井さんは私達のアイドルでした。
長井さんの、マンガへのあの途方もない情熱は私達の胸を熱くしました。
マンガという表現手段がキラキラと輝いていた時代に、長井勝一という人がそこにいたという事は、日本のマンガの歴史にとって大変幸せなことだったと思います。
「ガロ」のような雑誌をここまで維持されてこられるには、ちょっとやそっとのご苦労ではなかったと思います。
私は根っから絵心がなくて苦しさのあまり描くのを止めてしまいましたが、自分の人生のある時期の思いを形にしていただいた事を、大変ありがたく思っております。
ありがとうございました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

僕と長井さんの共犯関係

川崎ゆきお

長井さんがいなければ漫画家になれなかった人は非常に多い。僕もそののなかの一人である。長井さんがいなければ、今頃普通の社会人をやっていたと思う。長井さんが存在しなかった。……いや川崎ゆきおも存在しなかった。……いやそんなことはない、他の雑誌からデビューできたかもしれないと考えたこともあるが、それは不可能だ。

入選作としてガロに掲載することに対し、反対する人もいたようだ。これは反対して当然で、僕がもし編集者でも反対するだろう。半ば冗談で書いていた。どうせ投稿しても載らないのなら、嫌がらせをしてやろうと考えていた。つまりあまりにも絵が下手なので、投げやりになってしまい、入選しないような漫画を書いた。そのほうが落選したときのショックも少ない。ただでさえレベルの低い絵を、さらに低く書くのだから、書くのは簡単で、楽しく書けた。

しかしこれは出版社に対して非常に失礼な態度である。失礼ととられるか、表現ととられるかは微妙な問題だが、表現というのはもともと失礼なものなのだと開き直り、長井さんにぶつけてみた。同じぶつけるのならぶつけがいのある相手にぶつけないと、反応が面白くない。博打打ちは博打打ちを知るの例えはここでは当てはまらないが、それに似たような感じで、僕と長井さんの共犯関係が成立した。

僕のこの子供っぽい態度の裏側の葛藤を長井さんは知っていたのか、表現としての可能性として受け取ってくれた。長井さんがそう受け取っても他の人はそうではない。青林堂も会社である。長井さんは長い間僕の原稿を机の引き出しにしまい込んでいたようだ。それを入選作としてガロに載せるとは言い出しにくかったようだ。子供をおろすか産むかの選択で、長井さんは僕を産んでくれた。産んだ方もしんどいが、生まれる方もしんどいのである。

入選通知をもらったとき、僕は赤紙をもらった気持ちになった。十代の青年が、社会的に地位のある人から初めて認められたため、他はどうなっても、漫画を書いて行くしかないと恐い決心をした。

入選後、長井さんからアドバイスされた記憶がほとんどない。何を言っても無駄だと思われたのか、書けばうまくなるの一点張りだった。長井さんは決して下手な絵をよかれとは思っていなかったので、僕は上手くなろうと頑張った。下手な絵を売り物にする発想は僕と長井さんとの関係では無かった。

果たして長井さんは絵に対して何を考えていたのだろうか。これは他の漫画編集員にも言えるのだが、彼らは絵描きではない。だからその批評を聞いているとほほえましくなる。ものすごく誤解している。書いている側は、書いているときに何らかの雰囲気を掴んだりはずしたりする。その「何らか」は一種の面白がり方なのだが、本人にもよく分かっていない。本人が狙ったものよりも、周辺現象の方がウケたりする。表現者が頭で狙って書いたものなど小さなものなのだ。頭で狙っていない箇所の方にこそ豊かな世界がある。だから狙ったふりをしながら、周辺効果を生み出そうとする。これは書き手側としては、高等手段で、弾が何処へ飛ぶのか最終的には分からない。分からないが、ある程度コントロールしているのである。間接的だが。

長井さんが編集長として新人を育てる面白さもこのあたりにあったのではないか。僕も長井さんに育てられたのだが、頻繁にアドバイスを受けたわけではない。

では僕は長井さんに何を言われたのか、それを思い出して書いてみる。まず、長井さんの頭の中に紙芝居や貸本漫画時代の雰囲気が僕の漫画に残っていることを知らせてくれた。これはデビュー前に投稿した「死神を見た」という漫画が返送されてきたとき、封筒の中に走り書きされていた。長井さんの文字を見て、そこに記されているコメントよりも、コメントをもらったことで感動した。そのコメントには「あまりにも絵が……なので、掲載できるレベルではないので、この絵を何とかならないか……」と書かれていた。それで僕は絵の勉強するため、石膏デッサンを始めた。ところが買った石膏がベートーベンで、眼鏡をかけているのである。確かに画材屋で売っていた石膏像なのだが、これは本物の石膏で、

アクセサリー用の石膏だった。石膏なら何でもいいと思っていたのが間違いだった。長井さんの命令に従い、その石膏像をデッサンした。しかしこれは宗教儀式のような感じで、石膏擬きのものを置いて、それを拝んでいたのである。顔面はそれでよかったが、全身像のデッサンも必要になる。そこでGIジョーを買ってきて、それを書いた。しかしGIジョーの胸板は非常に厚いし、人形の悲しさで大便スタイルができない。そこで大相撲の場所中は毎日全身ヌード写真が掲載されるので、これを書き写した。それなりに動きのあるスタイルが多かったので、参考になったがいかんせん太いのである。こんなものばかりデッサンしているとデブしか書けなくなる。

つまり僕はそれなりに長井さんのアドバイスを忠実に実行した。成果があったかどうかよりも、態度が大事なのだ。

絵のレベルなどすぐに上がるものではない。長井さんは辛抱できなくなりガロに掲載してしまった。僕の絵の上達を待ちきれなかったようだ。ここではっきりしているのは、僕も長井さんも下手な絵を何とかしようという方針があり、上手くなることが当面の目標だったのだ。それが無理なら下手さが分からないようなタッチを開発することである。これはまんまと成功し、本当は非常に絵の上手い人が、無理に崩して書いているとまでだまし通すことができた。下手さを芸術として逃げ切るのは最終手段で、本当は芸術という最終兵器を大安売りしてはいけないのである。

ガロ入選後長井さんからのアドバイスはほとんどなかった。上京したときも、漫画の話はほとんどしなかった。アドバイスがないということが即アドバイスで、好きなようにやればいいと解釈した。

その後、青林堂から初めて単行本を出すとき、チラリとアドバイスを受けた。長井さんは僕に社会風刺的なものを期待した。この単行本のタイトルは「悪い奴ほどよく走る」だが、実際には「金環食」をもじった「貧環食」という貧乏神が出てくる漫画を長井さんが気に入ったらしく、それを巻頭に持ってきたのだが、このタイトルでは売れないので「悪い奴ほど……」になった。長井さんが僕に期待していたのは、水木しげるさんの風刺漫画に繋がる路線だったようだ。

それを最後に長井さんからのアドバイスは一切無い。ただ、今思うと、長井さんのアドバイスは、常識的で、特異なものではなかった。特異なものは常識の積み重ねの中からポイと天然に弾け出るようで、作為的には捻出できないことが分かる。

断片的な思い出

谷弘兒

三十年くらい前、小学校の六年生の時、「忍法秘話」という貸本漫画の会社に漫画の原稿を送った。数日後、会社に電話をすると、電話に出た人が投稿した漫画について、いろいろ意見を聞かせてくれた。その人が長井さんだった。

＊　＊　＊

夏の終わり頃、「ガロ」の創刊号が出た。本郷町のお菓子屋のとなりの本屋で買って、ブラブラ歩いて、ワシン坂の上の病院のとなりの廃園の、木陰の大きな庭石にすわってページを開いた。セミはミンミン鳴いていたけど、あそこの木陰はすずしくて、庭石もひんやりしていた。

＊　＊　＊

つげ義春も滝田ゆうも、林静一も佐々木マキも、毎月毎月意欲的な緊張感のある作品を発表していたし、新人の入選作も油断ができなかった。ぼくは、つげや滝田が今月はどんな作品を発表するのか、どんな新人が現われるのかと、毎月がとても楽しみだった。（つげや滝田の、当時の作品を収めた作品集を見て欲しい。ああいう作品が毎月、毎月、のっていたのだ。）他の漫画誌の漫画に興味を失っていたぼくも「ガロ」は毎月楽しみにしていた。

＊　＊　＊

後年、長井さんはちょっと元気がなくなったけれど、楠さんとか池上さんとかの名前が話題になると、長井さんの声は明るくなった。長井さんは、あの頃の若者がいちばん好きだったみたいだ。

＊　＊　＊

中学生の時、友だちが青林堂へ「ガロ」のバックナンバーを買いに行った。彼から会社の様子などをいろいろ聞いて、ぼくも行ってみたくなった。

春から夏に移る陽気の良い日の午後、神保町を歩き回って夕方近く、やっと会社を見つけた。「ガロ」の漫画に出てくるような家（ビルじゃなくて）の2階に会社があって、その日、初めてぼくは長井さんに会ったのだった。

＊　＊　＊

雨の日のうす暗い午後、会社に原稿を持って行くと、長井さんも、他の人もいなくて香田さんが、ひとりでいた。ぼくは長井さんの帰りを待つことにした。香田さんが「大谷君は誰の漫画が好きなの？」といって、プロの人の原稿を見せてくれた。その絵は「ガロ」の表紙のカラーの原画で、白い狼が血だらけの顔でイノシシの死体を食べている絵だった。

＊　＊　＊

その日は寒くて雪がふっていた。その日、ぼくが持って行った原稿を長井さんは、すごく気にいってくれて、食事に行こうといって、スシ屋へ連れて行ってくれた。冷たくなった手に熱い湯のみの感触が気持ちよかった。今日、渡した原稿の話をして、長井さんは「あれだけ描けるようになれば大丈夫だ。」といってくれた。今の自分を見れば、ちっとも大丈夫じゃなかったわけだけれど、それは長井さんの見まちがえだったのではなく、ぼくが怠惰だったためだ。

いつか、もう一度、長井さんとあんな時間を持ちたいと思っていたけれど、もう永久に不可能になってしまった。

＊　＊　＊

会社で小さなテーブルを囲み、お茶を飲みながら、みんなで話をしていた。五時になると長井さんが「はい、仕事の時間は終わり。」といって、机の下から一升瓶を出し、みんなの湯のみにつぎ、みんなでお酒を飲んだ。そのあと、ぼくは佐々木マキさんと二人で話しながらお茶の水駅へ歩いた。マキさんが「十年後くらいにさ、『陰溝蠅兒シリーズ』が再評価されて単行本が出たりしたら面白いよね。」と、冗談をいったりして二人して笑った。マキさんの予言は25年後に実現した。

マキさんと話をしたのは、その日が初めてだった。ぼくは17才で、マキさんは22才だった。

＊　＊　＊

昨年、ぼくはあの頃の作品を集めた作品集を出すことができた。あの頃、読者だった人が本を作ってくれた。本は郵送で長井さんに送った。この数年、長井さんとは会ってなかった。

＊　＊　＊

あの頃の「ガロ」の現場に立ち会うことができたということで、ぼくの前半生は十分すぎるほど面白いものになった。もちろん、それは、長井さんのおかげだった。

長井さんの思い出
（お世話になりっぱなし）

鴨沢祐仁

●阿佐ヶ谷「ぎんなんPart２」にて 左・鴨沢祐仁氏、真中・長井氏（'76〜77年頃）

新聞も取っていないぼくが長井さんの死を知ったのは、たまたま外出先で目にした1月10日の新聞で。1月5日のことだったと。私事で恐縮だが、95年は身辺に不幸や悲しいことばかり続き、女々しいだけで無能なぼくは只おろおろ泣いてばかりいた。でもこの正月、目下の最愛の存在が無事その危機を脱してくれ、漸く静かな気持ちになれた。7日の自分の誕生日には、賀状書けなかった分自作のカレンダーを各方面に送ったり、夏に亡くした父の写真や段ボール一杯の20年分のネガを整理してたら長井さんとの懐かしい写真も出て来た。暫くお目にかかってないけどお元気かしらなどと思い出していたそんな矢先の出来事だった。やっぱりぼくは只おろおろ泣いた。

長井さんは、ぼくの最初のまんが「クシー君の発明」を最初に読み、最初に認め、最初に世に出してくれた人。大恩人だ。それなのにぼくはずっと甘えっぱなし、お世話になりっぱなしだ。デビュー後、就職先も世話して貰い（直接的には南さんや糸井さんにお世話になりましたがやはり長井さんのお力も大きかったと）、フリーになる時にはアパートの資金までお借りした。当時も青林堂は苦しかったのに長井さんは「これは三平さん（白土三平氏）から借りたお金だが気にすることはない。あなたは必ず単行本を出す人だからその時に印税から返してくれれば良い。」と言ってくださった。未だ一冊分も作品が溜まっていない時にだ。お酒も随分ご馳走になった。阿佐ヶ谷の「ぎんなん」という店に行くと、大抵長井さんが若い女の子に囲まれていて、ぼくもそこに混ぜて貰って本当に楽しかった。決まって知らない間に長井さんは姿を消し、ぼくらが帰る段になると既に勘定は済んでいた。

材木屋の上の青林堂も楽しかった。南さんとワタナベさんの漫才（?）の合間に発する長井さんの一言が抜群に可笑しかった。長井さん語録の中では、これは直接聞いたのではなくガロで読んだのだが「猫の大きいのが犬で、犬の大きいのが馬で、馬の大きいのが牛だよ。みんな同じだよ。かわいいよ。」というセリフがすごく好きだ。涙が出る。その後お会いする度また描いてくださいよと言われたのに、果たせずにいる。ごめんなさい。

長井さん、天国でもきっと「モーゼルの勝っちゃん」で鳴らして入ることと思います。ぼくはあんなにお世話になったのに、未だサイトーさんや代の替わった山中さん相手に錬金術を使ってばかり。この性癖は直りそうにありません。いつか向こうに着いたらきっとまた長井さんにお酒を無心しますのでどうかよろしく。

編集長のことば　鈴木翁二

「おれ天皇陛下でッきらいだから」聞けばスッとする長井さんのこの言い草と、「ヘタでもよい。独創性のあるものを」というガロの惹き文句とは等価なのだと思えることがある。どんな構造の上に置いたときだろうか。

ある「新人」にとっての「漫画雑誌ガロ」編集発行人である長井勝一像を印象づける出来事が起こったのは1970年の、あるテレビ放送でのことだ。物言いをなりわいとする人たちに囲繞された私たちの編集長は、言葉数少なく、若干押し出しが足らなく見えた。それはよい。服装も質素だった。それもむしろ好ましい。場違いな場所へ出た者に感じる痛々しさはこちら側の心情の問題だ。つまり私たちは多少の危惧を抱いて眺めていた。すると長井さんは満を持したようにして言ったのだ。「白土の『忍者武芸帳』にしても夏目漱石の××などと同様の芸術味を覚える……」

もとより漫画文化の内実を探ると見せかけての、悪場所としての漫画本の断罪が番組の主旨だったのだろう。『柳生武芸帳』の表説にすぎないものが漱石と同じだとはなにごとか、と即座に村松某氏の一撃が放たれると、それは効果満点のまさに一喝になった。私たちの編集長は「申し訳ありません」と低頭してみせたのだ。ああ〜という溜息のような呻き声のようなものがテレビの前の皆の口から一様に洩れ出た。あの男はなんで謝るんですか、とその場の一同の気持ちを水木先生が代弁してこぼす。

あの夜に長井さんはうまく寝つけただろうかと後になって考えたことがある。あの夜に、自分が抱いてしまった得体のしれない固りを宥るために寝つくことの出来なかった「新人」たちは何人居ただろうかと。それは多い数ではないかもしれない。しかし皆無では勿論ない。

私は義理を欠くことが多々ある。実に多いかもしれない。その弁明はここで書く必要もないが、こんな私でも、おととしと先おととしの二度だが、最晩年の長井さんと対酌させてもらえたことは今にして思えば良事だった、と思うのだ。死者に対する思いは、なんだか古長靴の中底から摘むままに出てくる糸屑に似ていないか。所詮は私の足裏の匂いのみが染みついたそんな厄介な糸屑を振り払うには、差し当っては、真新しい近々とした像が役立つ。長井さんの糸屑が私、あるいは私も含めた何人かに対して言う文句は大抵きまっている。「わるいねー」とは主に稿料に関する言い訳だが、それをいわばアイサツのような口グセのような長井さんの独言として聞き流してきた私は、そう物言う人の側からその時そこに見えていた入り組んだ様々な男と女の、ココロとモノとの風景とでもいったものを、漫画家として、みすみす見過ごしてきたといえる。それだからいま一つの長井さんのクスグリの言葉を甘んじて受け容れてきたといえよう。「せっかく才能があるのになぜ描かないの」という慰め言葉がそれである。いったい何度聞いただろう。会うたびに言われて、言われるたびに羞恥心も忘れて慰んでいた気がする。今の私には、とっくにそんなことを言われる年齢ではなく、そんなことを言ってくれる人もこの世から居なくなったのだという事実のみが残った。

何度打っても響かぬ相手を長井さんはさっきの「風景」のどこへ立たせてくれていたのかは分からないが、今回の二度においては、「たくましくなったなー」と「お前はお前のやり方でイイんだよ」を加えてくれた。それでもおととしの二度目の折だ。神保町より阿佐ケ谷の酒舗へ向かう車の中でのことだが、ひととおりの人物評のあと「△△はえらいよな」と言うので次の言葉をまっていると、長井さんが続けたのは「今でも毎年暮になるとなにか贈ってくるものな」だった。これは「義理」というものを欠く俺への当てこすりなのか、どうかと真意を測りかねたのだが、なにか、まぜっかえしを押さえる空気もあった。その夜、呑み了えた後のことだが、自宅に誘われるままに尾いて行った私に、長井さんは白い封筒を手渡そうとした。もうそんなものを貰う年齢は過ぎたからと固辞しようとしたが、お前にじゃない、○○ちゃんにと私の妻の名を言って、お前たちが突然東京から居なくなった時に集めた餞別だからと言い訳をつけ加えた。私だってこんな場面は苦手である。好きな貧乏人の役どころだって打つ遣りたくなるときもあるのだ。しかしながら私のどこかに、ここ迄に至る様々な思惑と思惑の交錯が、場面の来歴とでもよぶしかないようなものが浮かんで消えたのもまた確かである。「ちゃんとわたすんだぞ」この言葉を私は長井さんが私にかけてくれた別れの言葉として、「天皇はきらい」の語録と共に大切に秘めておきたい。

私は実は封筒を着服したのだがいまはそのことを悔いる。悔いのついでに、人には笑われてしまいそうな思いつきをここに書いてみたい気がする。あのテレビの夜に、今夜は長井さんは眠れないだろうなと私たちは話し合ったのだが、眠れなかったのはある「新人」であろうとした私たちと、村松某氏の方だったのかもしれない。「わるいねー」も「申し訳ありません」も同義である。それは低頭する姿勢をとり続ける者の常套句として実は剣呑なのだ。私たちはクッキリとした実線で生の輪郭を引くことは出来ない。ああしたかった、こうもしてやりたかったという断念の先に幾人もの長井さんがいるように、私の上にもそれがある。それらはこの私に集約してはいるが暗い所では私を奪ってくる。これらが見合い関わり合うことが世の中だともいえる。この世の中を低頭する者の物言いの位置から眺めれば、それの虚妄に対して「私」とは空しいものとなるはずだ。

この事実により、それはこの者の目に見返されるということなのだが、恫喝者は眠れなかったのではないか。そしてこの目が「新人」の条件であることによって私たちもまた眠れなかったのではないか、と思う。「申し訳ありません」とはだから「天皇きらい」ともまた同義だったのである。

「山師」「赤本屋の親爺さん」が「長井勝一」に向かって歩いていたことは私には驚くべきことに思える。しかし、廃屋の庭でひろう陶器片のような、土のこびりついた、でもそれだから美しい言葉を持っていたのはガロだったことを考えるなら、「ヘタでもいい、独創性を」白土三平文案というこの一条を初めに目にし、誰よりもそのいうところの独自性のペテンと反ペテンとを考えあぐねたのは他ならぬ長井さんだったことを想像するなら、別に驚くようなことでもないのだ。「この最後の二ページは要らないじゃないのか」と言って若い私を怒らせたのも長井さんだったが、そんな私を追っかけるようにして届く葉書で、おれの読みちがいだった。あれが生命線だ。良い漫画だとキチンと言ってくだすったのは長井さんだった。お前はきらいかもしれないけど、こんなハガキのひとことでも、時には幻影ではない人生の味わいなんだけどねえと書いてあったのだと考える。

最後にいま一つの私のおもいつきを書いたら皆さんには大笑いされるだろう。長井さんはもしかして俺の描いた漫画の幾つかを本気で読んでくれたのではなかったか。長井さん長い間ありがとう。十三仏の彼方から笑ってください。

1996・2・19

私も死ねば、又、長井さんに会える。──安部慎一

遠かった人…長井さん

村岡栄一

こういう漫画を描きたい…そういう思いや可能性だけでも評価してもらえる年齢に何度かお会いしていただいた人でした。

私が師事した永島慎二先生が尊敬されている編集者であるという思いで遠くから見ていたような気がします。

夢や願望が意味を持たなくなり、現実に生きている姿、発表する作品だけが全ての評価になる…そういう年齢になってからは会えなくなった人でした。

会えなくなってからも恢復したいと願っていた数少ない人の一人でした。

ただ漫画を描く事だけが恢復するという信仰に近い思いで生きています。

私には遠い人のままの長井さんでした。

ご冥福をお祈りしています。

「少年期」（1975年３月号）より

思い出す事々

野間吐史（豆本出版パロマ舎）

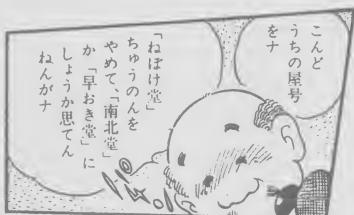
初めて長井さんにお会いしたのは、昭和46年、僕が永島慎二先生の内弟子の頃でした。

「風っ子」「フーテン」「漫画のおべんとう箱」の編集のお手伝いをさせていただきました。この頃、一番長井さん御夫婦にお世話になりました。その後、僕が小学館でカットの仕事を始めた時も親身にアドバイスをいただきました。

そして光栄にもガロにてデビュー作ものせていただいたのです。

豆本出版を始めた時も、相談にのっていただき、お礼に差し上げた豆本達は長井さんによって配分され、思いもかけない方面からお誉めをいただきました。

いつも温和な長井さんが、怒っていたのは楠勝平さんが亡くなられた時でした。

体の弱い楠さんに無理をさせた編集者に対しての怒りでした。名伯楽であった長井さんにしてみれば、言語道断の出来事だったのでしょう。

「ねぼけ堂異聞」（1973年12月号）より

月はその時空にいた

向後つぐお

私がまだ十七、八の頃だったでしょうか新宿の小料理屋の二階の座敷でどなたかの出版記念のお祝いに永島先生に連れられてお邪魔した時長井さんは突然「アイ」に掲載された私の漫画を「ガロ」でそのまま使わせてくれませんかと言われ私を驚かせてくれました。呆然とする私に永島先生が、有難いお話だから、そうさせて頂きなさいと勇気づけて下さり私は手直しして長井さんにお渡しする決心をしました。恐る恐る神保町の「青林堂」へ原稿をお持ちすると長井さんと奥様がにこやかに応対して下さり、漫画論など仰らずに（面白ければいいんだよ、また何か出来たら描いて下さい）と言われ嬉しさの中でそれでも一種独特なムードの編集室？で私の緊張感は抜ける事がなかった。「青林堂」「ガロ」このネーミングは私に貸本時代の延長線上にあるようなノスタルジックな響きがして私を酔わせた。（漫画は売れなけりゃ意味がないよ。二十五才迄に売れなきゃダメ。「ガロ」だって商業誌なのよ）と聞かされた時程驚いた事はなかった。（向後クンもっと通俗小説を読みなさい）と教えられた事も思い出されます。

瞬きさえしないのではないかと思う程長井さんは私の眼を見すえたまま熱っぽく、いつも熱く漫画の事を語り奥様が慈愛のまな差しで私を見ていて下さいました。ある日勝又さんが「青林堂」へ来られ机の上に無造作に原稿の入った袋を投げ、勝手に小さな茶筆筒からご自分用の湯呑みを取り出し、お茶をすすり乍ら長井さんと古い友人のように世間話しをしているのを傍で見て私は、ああいいな、私も早く長井さんとあんな風に肩の力を抜いて自分の湯呑みでお茶をすすり乍ら世間話しや戯言を愉しみたいなと強く思ったものです。あれからもう二十数年たちます。ご無沙汰して済みません。長井さんが逝くなんて思ってもおりませんでした。「ガロ」を思う時、長井さんを思う時いつも私は中也の「頑是ない歌」を思い出します。……月はその時空に居た…。長井さんながい間本当にご苦労様でした。お世話になり本当に有難うございました。

長井勝一様

向後つぐお

「ひとつぶのなみだ」（ガロ1969年３月号）より

ふつつか者

江見神也

（元青林堂編集員）

長井さんからはよく、「おかしいなー、江見くんは、間違えて採っちゃったんだよなー」って言われてました。私が「やめます」と言ったとき、ほっとした顔をされた長井さん。そのくせ、やめたあと遊びに行くと、すまなそうに小遣いをくれた長井さん。出来の悪い子ほど可愛いのかなと、勝手に理解させてもらってました。ガロも読まなくなって、青林堂に足を運ぶこともなくなり。こちらの時計が止まっている間に、材木屋の二階から青林堂は消え、そして長井さんも往ってしまわれました。でも、いつも私の心の中には、あの頃の長井さんが生き続けています。下駄履きの私を叱りもせず、「いいなー」と言って、自身も下駄履きでこられた長井さん。青林堂史上サイテーの社員だった私を、二年近くも面倒みてくださってありがとうございました。お世話になるとき、「ふつつか者ですが」とあいさつしたのが、入社の言葉としてはヘンなのかと、ずーっと思ってました。しかし今回、こんなに遅れてしまって、「やっぱり江見くんは、ふつつか者だなー」って、長井さん、笑ってらっしゃるでしょうね。

長井さんへ…

関口シュン

小学生の頃、ソロバン塾のゲタ箱の上にサンデーやマガジンと一緒に並んでいて、いつも読んでいた「ガロ」。
　都電に乗って、本駒込から神保町へと漫画あさりに行ってた時、ふと通りかかった「青林堂」。
　中学3年の春休み、16ページの漫画を抱えて初めて訪ねた「ガロ編集部」。
　15才が描いた漫画を、ていねいに読んで、感想もきちんと言ってくれて、「楠勝平はすごいゾ!」とか、あれこれ話をしてくれた「長井さん」。
　話の意味もわからず、ガロに載せる夢破れ、帰りに寄った喫茶店のコーヒーの苦かったこと。
　18才の初秋、永島慎二先生の所に住み込み、コーフンしながら初めてお手伝いした「そのばしのぎの犯罪」の原稿を受け取りに来て、応接間のイスにちょこんとすわっていた「長井さん。」
「先生にはいつもお世話になっていて…」とアシスタントの分際の僕に深々と頭を下げ、「ありがとうございました。」と、また腰をひくくした「長井さん」。
　豪華限定本「風の吹く街」の大変なアイデアを、香田さんたちと楽しんで打ち合せ、作ってしまった「長井さん」。
　その後も先生の単行本の装幀をさせていただく中、例によって昔の話や、漫画の話をたくさんしてくれた「長井さん」。
　21才で独立して初めて描いた漫画をガロに載せてくれて、夢の「ガロでデビュー」という誇り高い肩書きをつけてくれた「長井さん」。
　そのうち、「君はウチのよーな雑誌に持ってきてはイカン!もっと売れるモノを描きなさい。」と、キビシく激励してくれた「長井さん」。
　阿佐ヶ谷の自宅で餌づけしていたノラ猫が出産してしまい、そのうちのいちばんノラっ気の強い子猫をもらいました。
　また、ソバのお土産を持って伺ったとき、「ビンボーなくせして、こーんなことしちゃイカンよ!。」と、苦笑してくれたこともありました。
　そして、手塚先生が亡くなり、その震える闇の中、通夜へ向かう永島先生と長井さんのために、車を出し運転手をつとめられたことは、感慨無量でした。後部座席で大漫画家を語るお二人の思いのなんとすばらしかったことか…。
　あるときは一人で、またあるときは香田さんとご一緒に歩いていた阿佐ヶ谷の街に落ちた長井さんの影。
　その影は、街のみならず、日本中に広がり落ちたもの。
　漫画という世界を、編集者として漫画家と一緒に創ってきたその偉大なる影は、深く、そしてとても濃いものです。漫画に携る多くの人たちは、長井さんという人の認識と評価をしっかりと道佳く者として、今一度心に刻みつける必要があると思うのです。
　僕は、手塚先生と同様に、長井さんの存在に甘えてきてしまいました。甘えられたことは、とても大きな喜びでしたが、これからは、本当にそんなことはもう出来なくなってしまいました。

――合掌

六回の長井さん

ユズキカズ

長井さんとはこれまでに六回程お会いすることが出来ました。一番最初が一九八一年のことですからもう十五年が経ってしまいました。でも殆んど話しらしい話しをしたことはなく、たいてい短い挨拶で終っています。

「ユズキです。」「あっユズキさん。」こんなもんです。でもその声は今も耳に残っていて思い出します。かすれて高い声でした。

　その声を初めて聞いたのが一九八一年の一月、僕は「シカゴパレス」と題したマンガを持って青林堂の細い階段をトントントンと上がって行きました。こんなダセー、マンガ書くんじゃなかった。こんなの見せたら何言われるかな?でもせっかく書き上げたんだから見てもらわなくちゃ。堂々と見てもらいましょう。などと考えながらドアをノックしました。長井さんがいらっしゃいました。顔は解っていました。写真も見たし、それより何より水木しげる先生のマンガで知っていました。原稿を見せました。長井さんが見ております。僕の稚拙なマンガを見ております。僕は隣りのイスに座ってチラッチラッと視線を走らせます。目の前で生原稿を見られることって本当に恥ずかしい。早く見終って何か言ってくれ。見終って言われました。「この原稿預らせてもらえますか。」それからさらに思いもかけないうれしい言葉を言われました。「この絵はうまくなる絵だと思うんだよな。」えーっ。うまくなる絵だって本当かよ。でもそうだと思った。

　お調子者の僕は有頂天になってトントントンと階段を降りて帰りました。でもその言葉の後に続けてこうもおっしゃったのでした。「たくさん書かなくちゃいけないよ。大変だろうけどさ、たくさん書かなくちゃ」そうこれが大事、でもこれが僕にはできません。やりません。全然書きません。頭でっかちになっていて思うばっかりで手が一向に動きません。明日やろう明日からと思っているうちに平気で一年ぐらい過ぎてしまうのでした。一年後に「まゆこ理科室」を書いてまた細い階段を上がって行きました。この時は長井さんでなくて確か谷田部さんに見ていただいました。長井さんもいらっしゃいました。僕は軽く会釈でもしたのでしょうか?覚えていません。僕のことなんか忘れていたかもしれません。

　二度目はそれから二年後また階段を上がって行きました。この時は何の用事で行ったのか思い出せません。翁二さんの「銀のハーモニカ」という作品集を買いにいったんでしょうか?でもこれはどこかの書店で買った気もするし……忘れました。覚えているのはその時長井さんから叱られた事です。僕の商業誌での最初の仕事は白夜書房から出ていた「パニック」というエロ劇画誌です。「最近こんなものを書いてます。」とその雑誌にのった僕のエロマンガを見せたのでした。それを読み終って長井さんは「こんなの書いてちゃいけないよ」とほとんど不機嫌な声で言われました。エロマンガがどうのこうのというよりも内容がつまらなかったからでした。これが三度目。

　四度目は地下鉄のホームで偶然に、五度目は花輪さんが北海道へ行かれるというので、その送別会の席で、六度目は上野さんの映画評のイラストを書かせてもらうことになって編集部にうかがった時。十五年間に六回、これで全部です。もっとたくさん会ってたら、もっとたくさん叱られていたでしょう、ガロにマンガをのせたのはもっと少なくて五回だけ。少なくて恥ずかしいです。でも「朗ラカニ歩メ」というマンガは長井さんがとても喜んでくれたみたいで、その話を編集の志村さんから聞いて僕もとても嬉しかった。こんな困ったマンガ家の僕は人前で大っぴらにマンガやって良かったなどと言えませんから一人になった時小さい声で言います。長井さんの声はいつまでも忘れられません。安らかに、ご冥福をお祈りいたします。

ご冥福をお祈りいたします

湯村輝彦

ガロ83年7月号

長井さんとは一度もお会いしたことはありませんでした。が、ガロの表紙をやったり、マンガを描かせてもらったり、タダだったけれど、イラストのトレーニングにもなったし、かなりの好き勝手なわがままを許してくれた長井さんの心の広さに感謝しています。

何時だったか、正月号の表紙を、金の特色を使ってウンコの絵でやりたいと言ったことがあって、「それはダメだ」と言われ「クソーッ」と思ったこともあったけれど、ガロの表紙は「週刊新潮」の谷内六郎みたいに、俺のライフワークにしたかったと今でも思っています。

大事な表紙を俺のムチャクチャな絵で汚しているようなうしろめたさもあって、ずっと心のどこかに引っ掛かってはいたんですけどー。一度ちゃんとご挨拶とお詫びをして、感想などお聞きしたかった——。

遂にお会いするチャンスがないままお亡くなりになってしまったことが心残りです。

ご冥福をお祈りいたします。

長井さんは優しい人でした

佐藤義昭

長井さんの訃報を知ったのは一月十日の朝刊でした。ここ数年癌手術をなさったということだったのである程度覚悟はしていたのですが早すぎる死だと思います。何か大きな柱を失った事を実感致しました。少年時代読まさせてもらった貸本マンガでは水木・白土作品に夢中になりましたがこれらが長井氏の手によるものであり、その後ガロを読むようになりと考えていくと私の人生はここまで長井氏に連れて来て戴いたようなものでその先頭を失って途方に暮れるばかりです。

私は1973年よりお世話になり迷惑のかけどうしだったと思います。その頃私が淋しいようなマンガばかり描いていたので心配して「阿佐ヶ谷の自宅のほうに将棋でも指しに来るように」と手紙を戴いたことを懐かしく思い出します。

長井氏の御冥福を御祈り致します。

「各駅停車で」（ガロ74年5月号）より

偉大なる死のほとりで

井口真吾

長井さんはずっと阿佐ヶ谷の南側に住んでいらっしゃったが、私も阿佐ヶ谷の南側に住むようになってもう八年くらいになる。ほんの数回、駅や道できまって香田さんと御一緒の長井さんをお見うけした。会釈をするだけで話をすることは阿佐ヶ谷ではなかった。長井さんは小柄でやせた人という印象がいつも残った。けやき通り沿いのジョナサンの前を通ると、そのビルの上階に住んでいらっしゃる長井さんのことを時々想った。

長井さんが亡くなったのは今年の一月の始めだった。長井さんが死の数時間前まで入院されていた阿佐ヶ谷の河北病院に、私も正月そうそうお世話になった。食道の痛みや下痢や高熱が続き、一時は食道癌も覚悟した。何週目かの検査で重症の食道炎とわかり安心したが、あまりの痛みに一ヶ月間は一日おかゆ一杯がやっとだった。河北病院の待合室の黒いソファーの上で、その病院につい最近までいらした長井さんのことを考えた。

人生には色々なことが起きる

私はガロに参加させてもらっていらい十三年、毎日不思議な旅を続けているような気分だ。かつて私は、希望を失いかけた若者だった。呼吸する意味も見い出せないまま、この世の果てを貧血気味にふらふらと徨っていた。しかしある日、神保町にあった狭くて急な階段の上のガロの門をくぐってからというもの、私の人生は少しずつ変わり始めた。心の通じ合う人々との出会いや自分の世界を見つめ直すことを重ねてゆくうちに、はみ出していた自分の足元に、ぼんやりと居場所が形成されてゆきつつあることに気づいた。たぶん、私以外にもたくさんの人々が同じような体験をされているのではないだろうか。ガロにはある種の救済があり、解放がある。

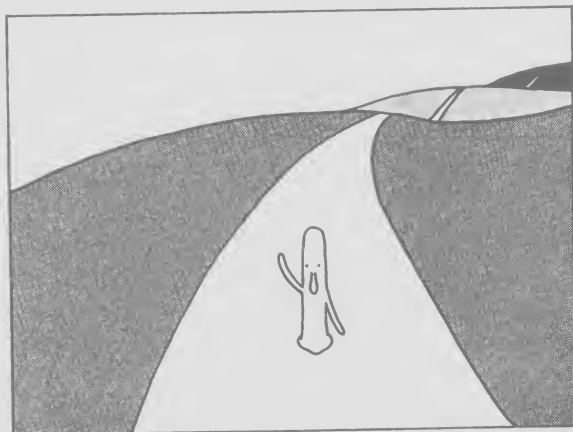
ガロは沈みそうになりながらも航行を続ける箱船のようなおもむきもある。しばしば逃げ出したい衝動にもかられるが、行く方への興味や期待が船上へ我々をとどまらせる。二十世紀末の大洪水をガロははたして乗り切れるだろうか。

ところで、現在の日本の漫画雑誌の中で、ガロが一番歴史が長いという事実をあなたは御存知でしたか？

ガロは長井さんから始まった。長井さんが存在しなければガロは存在しなかった。ガロが存在しなければ今の自分も存在しなかった。

人生には色々なことが起こる
宇宙の意味を問う者の上にも
小鳥の声に耳を傾ける者の上にも
一人ぼっちで窓辺に座る者の上にも
伝説を信じない者の上にも
路上で途方に暮れる者の上にも

長井さん、どうもありがとうございました。

御冥福をお祈りいたします。

最後は「ガロ」が勝利する

鈴木邦男
【一水会代表】

長井さんとはパーティの席でお会いしただけで、じっくり話したことはない。しかし「ガロ」を通し、本当におせわになった。こんなことになるなら厚かましいと思われても押しかけて、もっともっと話を聞いておくべきだったと悔やんでいる。

長井さんは宮城県塩釜市の出身だった。うかつにも僕は知らなかった。新聞に載った訃報で初めて知った。エッ、同郷の先輩だったのかと驚いた。僕の父は五年前に亡くなったが塩釜の生まれで、墓地も塩釜のお寺にある。鈴木家の本家も塩釜だ。長井さんは「ガロ」をつくり、日本の漫画を支えてきた遙かに遠い人だと思っていたのに「塩釜出身」と聞いただけで急に身近な人に思えた。

そうか、東北人の粘り強さが「ガロ」を支えてきたのかと一人で納得した。大学に入った時に上京して以来、僕は「東北出身」ということにコンプレックスを持ってきた。言葉が重く訛りがあり、どうしても田舎者あつかいされてしまう。自分を表現するのも下手だ。東京の人や関西出身の人がペラペラと喋るのを見て学生時代、本当にうらやましく思った。僕なんてちょっと喋っただけで「東北だろう」と分かってしまう。馬鹿にされてるようで人前では堂々と話せない。性格も暗くなる。友達も出来ない。だから右翼になるしかなかった。あーあ、何で東北になんか生まれたのかと親を恨んだ。

しかし今は違う。そうか、長井さんも東北か。東北の人は世渡りは下手だが真面目だし、粘り強い。東北人だからこそここまでやってきたんだろうと思った。東北人であることを初めて誇りたい気分になった。「ガロ」とはとても比べものにならない小さいものだが、「レコンキスタ（失地回復）」という月刊誌を僕はずっとやってきた。22年目になる。何度もやめようと思ったが、「せっかく始めたんだからもう少し頑張ろう」と思い、そう思っているうちにこんな年月になったのだ。東北人の粘り強さかなと思っている。

かつて「ガロ」がミニコミの特集をやった時に取材されたことがある。「ガロ」が頑張っているんだから僕らもしっかりやらなくてはと励まされてきた。「ガロ」は心の支えだったという話をした。それに、今後は「ガロ」を見習って「コミック・レコン」を出したいと言った。しかし、これはまだ実現していない。ただ、東北人の粘りで、いつの日にか実現させたいと思っている。

先日、「サピオ」（2月28日号）を読んでいてアッと思った。小林よしのりさんの「新ゴーマニズム宣言」だ。欄外に長井さんの亡くなったことにふれて、『カバ焼きの日』を見て『問題ないんじゃないの』と載っけてくれた人だ」と書いていた。そうか、長井さんのこの一言で載ったのかと分かった。

実はこの「カバ焼きの日」が縁で僕は小林よしのりさんと知り合い、「スパ！」と知り合い、そして「スパ！」に連載を書くことになったのだ。当時、ゴー宣は「スパ！」に連載されていたが皇室問題を扱かった「カバ焼きの日」が危ないと思われ、上層部の判断でボツにされてしまった。「皇室タブー」におびえ自主規制してしまったのだ。

この問題について月刊「創」で小林さんと対談をした。「カバ焼きの日」を見て「問題ないんじゃないの」と僕は言った。長井さんと全く同じことを思い、同じ言葉を喋っていたんだ。やっぱり同じ東北人なんだと嬉しくなった。「スパ！」でボツになったものを「ガロ」は載せてくれた。そして一般の人々の目にふれることになった。小林さんは「スパ！」を出している扶桑社の幹部を粘り強く説得した。そして何と単行本では復活させた。奇跡だ。小林さんも偉いが、危険を覚悟で載せてくれた長井さんもすごいと思った。

「ガロ」は現代の「かけこみ寺」だと思った。あの時、「ガロ」以外には、どこも載せてくれなかっただろう。「カバ焼きの日」は「ガロ」がなければボツになったままだったろう。「ガロ」があって本当によかったと思う。ゴー宣だけではない、日本文化のためにも「ガロ」があってよかったと思う。

大袈裟だと思われるかもしれないが、違う。日本にはおびただしい出版物があふれ、情報が氾濫している。言論は全て自由だと思われている。しかし、ゴー宣事件でも分かるように、それは吹けば飛ぶような危うい自由だ。大出版社、大マスコミであれば、なおのこと自由はない。タブーに立ち向かう勇気もない。だからこそ、「かけこみ寺」である「ガロ」の存在意義は大きい。多くの人々が「ガロ」にかけこみ、そして大きく巣立っていった。貴重な存在だ。文化をうむ現場だ。東北人のパワーは粘り強く、ジワーッと効いてくる。そう、最後は「ガロ」が勝利する。

「長井勝一氏を悼む」

野阿 梓
（はなのまり）

ガロ作品総目録
付・作家別索引
はなのまり編

私は生前の長井氏とお会いしたことがない。

電話でそのお声に接したこともなければ、お手紙をいただいたこともない。

土台、私は、一応、プロのSF作家ということになっているが、「ガロ」にマンガ作品であれ、エッセー等の文章であれ、依頼され、掲載されたことはないのである。

では、なぜ私がこのような文章を書いているのか、というと、それは、私が「ガロ」の一ファンだからだ。例えば、ペンネームの〈野阿梓〉ではなく、別名で読者サロンなどに、拙いレターを投稿したりしている。

しかしながら、「ガロ」と私をむすぶ一番の接点は、私が以前、ファン活動として行なった出版だろうと思う。

たった一度だけ、私は長井氏から、その著書をいただいたことがある。八二年の春、ちくまぶっくすの「『ガロ』編集長」というご本がそれだ。見返しには、私の名前と、「長井勝一」という力強いサインがあり、私は当時、恵送されたこともふくめて、その後書きに心をふるわせた。すこし、引用させてもらう。

「一九八〇年の夏、わたしの手許に、タイプ刷りで百十二ページほどの本が送られてきた。表紙には、「ガロ作品総目録　付・作家別索引」の文字が印刷されている。編者は、九州にお住まいの、はなのまりさんという、まるで少女マンガの主人公のような美しい名前をお持ちの、男性である。

わたしは、パラパラとページを繰ってみて思わずうなった。『ガロ』の創刊号から一九七九年十二月号まで、百九十二冊について、毎号の目次が載っており、おまけに作家別の索引までついているのだ。大変な労作である。しかも自費で出版されており、いささかの営利も目指したものではない。

わたしはつくづく『ガロ』を今日までやってきてよかったと思った。こういう読者に出会い、こういう読者に支えてもらって、『ガロ』はなんと幸福な雑誌だろうと思った」

〈幸福〉なのは、これほどまでに過分なコトバをもらった私の方である。「ファン冥利」という言葉があるが、まさしく、こういうことを云うのであろう。

八〇年の夏、たしかに私は、「ガロ作品総目録」を自費出版した。それは、前年に作家の卵としてデビューし、また同時に社会に出ていた私は、しかし、いまだ〈何者でもない存在〉であったし、まだまだモラトリアム気分を引きずっているような状態だった。まあ、ヒマだったとも云えるのだが、私は、とりたててビブリオマニア的人間ではなく、書誌を作るなどといった作業には本来、不向きな性格である。それが「ガロ作品総目録」を作った動機は、そうした宙ぶらりんの私が、学生時代に出会った、大切な何かを、なにかの形で記録に残しておきたい、という気持ちが一つ、あったと思う。

それはまた、自分の創作にも、大きく影響を投げかけている作家や作品へのエールでもあった。私がSF小説を書くようになった直接のモティヴェーションは、少女マンガなのだが、「ガロ」の作品にも少なからぬ影響をうけている。

「六の宮姫子の悲劇」つりたくにこ、「李さん一家」つげ義春、「アンリとアンヌのバラード」佐々木マキなど、それらの作品は、ただの読み手から書き手に移行する私にとって、非常に重い衝撃をもっていた。新しい何かを作ることの意味を教えられた、と云ってもよいだろう。そしてそれは、「ガロ」という場所なくしては、ありえなかった。

だから私は、一ファンとして、ちいさな書誌を作ったのだ。長井さんの厚情あふれる文章は、およそ私が行なった作業に対しては過大にすぎる評価ではあるが、「ガロ」の大勢のファンを代表して、そのコトバをいただいたのだ、と感じたものである。

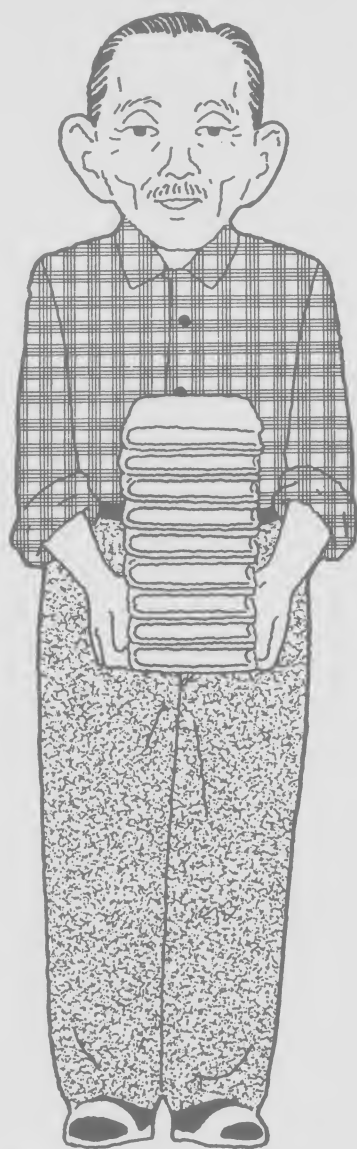
「ガロ」は、そのような〈場所〉だった。そして、その〈場所〉は、長井勝一氏というユニークな編集者なくしては、持続できなかっただろう。商業主義と同人誌出版の境界侵犯のような、「ガロ」独自の路線は、長井さんの豊かな見識と、おそらく大変だったであろう経済的なご苦労の上に成り立っていたはずである。

その長井氏の精神の豊かさと、多年にわたるお骨折りに対して、あくまでも一ファンとして、私は、心からの哀悼を送りたい。

そしてまた、長井氏を失った今、「ガロ」が、故人の精神を継いで、時代的にも大きな境い目にある一メディアとして新しい道を歩み、すぐれた新人の表現の〈場所〉となることを、切に希ってやまない。

合掌。

新鮮でショックだったあの言葉

ひさうちみちお

僕は長井さんとはあまり喋ったことがない。上京してガロにマンガを持ち込んでいた頃はずっと南さんにみてもらっていた。その時にも青林堂のあの部屋の中に長井さんはおられたが僕自身が誰とでも気軽に喋れる性格ではないので南さんが僕のマンガを批評してくださるのを聞いているだけだった。

ただ、材木屋の二階時代の青林堂の例の部屋は決して広いとはいえない。だから南さんにマンガをみてもらいながらでも長井さんの動きはつかめる。室内に机は六つくらい並んでたと思うのだが、香田さんも南さんも渡辺さんも斉藤さんも手塚さんも、だいたい机の前に座って仕事をしていた。長井さんだけが机の前に座って仕事しておられる姿の記憶がない。

僕はもともと記憶力の良い方ではないし、最近特に忘れっぽくなってはいるのだが、そうしょっちゅう青林堂に出入りしていたわけではないから、机の前の長井さんを見たことがなくても特に不思議なことではない。入口の横の方にソファーがあったりなかったりしたけど、だいたいそのあたりに立っておられることが

多かったように思う。そこで本の山を移動させるような、机の前の仕事に比べるともう少し体を動かすような仕事をされていた印象が残っている。

　これは飽くまで今漠然と思い浮かべる印象だ。考えてみると一番お年寄りの長井さんが本の山を運んだりするのはおかしい。無論運ぶといっても外の階段を昇り降りするのでなく、室内のごく近い距離の、マー並べかえ程度の意味なのだが、それにしても机に座っている方が長井さんの年齢にふさわしい。

　いや実際僕が知らない青林堂の日常においては机の前に座っておられることも多かっただろう。結局立っておられた記憶だけが残っているとゆうのは後から知った長井さんの印象が机の前の姿を頭から消してしまったのかもしれない。

　満州におられた頃とか終戦直後の話は人づてに聞いている。直接聞いたらすごく面白い話らしい。そおゆうエネルギッシュで、ある種生臭いといえるような実像が僕の頭の中で長井さんを机から遠ざけてしまったのかもしれない。

　ところで冒頭に長井さんとはあまり喋ったことがないと書いたけれど、数えてみても二、三回くらいかと思う。その内の一回は僕が最初に青林堂へ行った時だった。それもやはり喋ったとゆうより長井さんが僕の持ち込んだ漫画を批評して下さるのをただ聞いていただけのようなものである。南さんに最初に見てもらった時も僕はうんざりするほど面白くない漫画を描いていたが、この時長井さんに見てもらったのはたぶんそれ以上につまらないものだったろう。

　六十年代後半あたりからガロを読み出してガロに投稿しようと思うようになる漫画少年はだいたい二つの大きな勘違いをしていたのではないかと僕は思う。少なくとも僕はしていた。

　二つの大きな勘違いとゆうのは「私小説ふう」と「シュールレアリズムふう」である。「階級史観ふう」もあったかもしれないが数の上では前出の二つの「ふう」が多かったのではないだろうか。どちらかの「ふう」をやってさえいればユニークであると思い込むことが出来た。

　独創性とゆうものは面白いものを作る為の要素なのに、肝心の面白いとゆう目的が抜け落ちて毛色が変わってさえいれば良いと思い込んでしまう。しかもいろんな表現に触れてない視野の狭い高校生なんかは、単にメジャー系の漫画とは少し違ってるくらいのことでユニークであると思い込んでしまう。僕が長井さんに見てもらった時は高校生ではなかったが漫画は高校時代に描いていたものとはさして変わってなかったはずである。

　どおゆう内容だったか今となっては全く思い出せないのだが、多分「私小説ふう」にこれといって面白くもない自分の私生活をだらだらと描いていたのだろう。そのつまらない漫画を長井さんは「やれやれ」といった表情もされずに、ていねいに見て下さった。そして見終わった後にこんなことを仰ったと思う。

　『こおゆうテーマは描いた当人やその友達が読めば面白いかもしれないが、作者のことは何も知らない他人が読んでも楽しめない』とゆう批評だった。すごく正論だ。それから最後にこんなことも仰った。『漫画雑誌とゆうものは読者が自分でページをめくって読むものだ。そして単行本と違って他の人の漫画もその後に載っている。面白くなければとばされて次の漫画を読まれてしまう』

　変なふうに自惚れて自分の漫画は当然読まれると思い込んでいた僕には、ものすごく新鮮でショックな言葉だった。小さい頃から漫画を読みながら描き、描きながら読んできて、漫画とはこおゆうふうに描くものだと思い込んできた僕の凝り固まった頭を、この言葉はどこか崩してくれた気がする。

　その二年後くらいに僕は上京してガロに持ち込むようになってから、少しずつ自分の硬い頭を崩していくのだけれど、そのきっかけは今思えば長井さんの言葉だったのではないだろうか。

　現在僕は、住宅ローンなんか毎月はらうくらいのちゃんとした小市民ヅラをしている。学歴もなく怠け者で要領も悪いから将来はレゲエのおっちゃんになるだろうと思ってた僕が間借りなりにも喰えているのはガロのおかげである。そのガロを創ったのは長井さんなので、つまり僕がダンボールでなく狭いながらも普通の家に住んでられるのは長井さんのおかげといっても良い。有難うございました。

長井さんの思い出

近藤ようこ

私が長井さんに初めてお会いしたのは、二十年ほど前の大学生の時だった。当時の私は、自分が将来プロの漫画家になるなどとは想像もしていなかった。なろうという気がなかった。読者のひとりとして、「ガロ」のバックナンバーを買いにいったのだ。

友人とふたりで、あの材木屋の二階の青林堂へいった。狭くて急な階段をのぼり、ドキドキしながら編集部を訪れた。

たぶん南伸坊さんや渡辺和博さんたちがいらした頃だ。キリッとした感じの女性は、きっと香田さんだったのだろう。そしてもちろん、長井さんがいらした。「ガロ」の似顔絵とそっくりだった。その当時の私の小さな世界で、長井さんはすごい有名人で、すでに伝説的な偉人だった。ほんとに青林堂には、長井勝一さんがこんな顔をしているんだなあと思った。

私たちは極度に緊張していた。たしか、長井さんが桜湯をすすめてくださったと記憶している。それをいただきながら、壁に貼ってあった篠原勝之さんのポスターを見ていた。大学にも貼ってあったので、私が「学校のポスターもらえないかなあ」と友人にいうと、長井さんが「先手必勝だな」とおっしゃった。

私たちはそそくさと帰ったが、胸は感激でいっぱいだった。考えてみるとその時、長井さんはまだ五十代の半ばだったのだ。けれども私には痩せた長井さんがもっと年配に見えた。それは長井さんの心身ともの ご苦労のせいでもあり、私自身が若かったからだろう。

二度目にお会いしたのも、やはり友人と本を買いにいった時だ。大きな本だったので、友人は風呂敷を用意していた。長井さんはそれでていねいに本を包んでくださった。友人は長井さんが宇野重吉に似ている、といった。私もそう思った。

それから何年も、長井さんにお会いしなかった。その間、私は「ガロ」に投稿して入選しているのだが、編集部からなんの連絡もなかったので（それが普通だったらしい）、私は勝手に「ガロには描かせてもらえないんだわ」と思い込み、さっさとアリス出版へ持ち込みにいってしまったのだ。

しばらくして、三流劇画誌で描きはじめたものを青林堂で出していただくことになり、初めて私は描き手として青林堂を訪れることになる。

そんないきさつと、生来の人見知りのために、長井さんから直接に指導を受けることもなく、親しくおつきあいさせていただくこともなかった。パーティなどでご挨拶する程度だった。そんな時、いつも長井さんは変わらないなあと思った。昔、実際よりもおじいさんだと思っていた分、かえって長井さんはいつまでも若々しく、小さなお体にエネルギーが満ちているように見えた。

……その長井さんが亡くなった。私には突然のことだったので、知らせを聞いた時、一瞬頭が混乱した。現実味がなかった。そして、短い入院の後の、あまり苦しまない亡くなりかただったようだと聞き、少しホッとした。私はほんとうは長井さんのことを何も知らないのに、なんとなく長井さんらしいと思ってしまった。

私もすでに純情な大学生ではなく、漫画界の片隅にしぶとく居すわる中年女になってしまった。「ガロ」との縁は濃いような薄いような、つかず離れずのつきあいだ。長井さんとの関係も、個人的には淡い想い出しかないのだが、長井さんが「ガロ」を作っていなければ私は漫画家になっていなかったはずで、やはり深い縁があったといえる。

そうだ、一度長井さんにキスしたことがある。「会長就任と古希を祝う会」で、内田春菊さんといっしょに、片頬ずつキスしたのだ。私は遠慮気味だったが、内田さんの口紅はしっかり長井さんの顔を飾っていた。私ももっと強烈にすればよかった。喜んでくださっただろうか。

長井さん、長井さん。

杉浦日向子

長井さん、長井さん。干支のはじめのお正月に、いってしまった。新聞で知りました。訃報に接したとき、どういうわけか、「長井さん咲いた」と、ふとおもいました。本来は、「散った」というべきところなのでしょうが、一瞬、爛漫に咲いた、長井さんの笑顔が、頭いっぱいに蘇ったせいなのかもしれません。

長井さん。材木屋さんの二階に、ふらりと立ち寄ると、にこにこと、皺々の笑顔で抱きすくめるように迎えてくれました。「おかげさまで、たすかります」。長井さんは、お茶をすすめながら、かならず、ソウ言いました。身のちぢむおもいです。たすかったのはこっちです。どれだけ、ささえられ、はげまされたことか。マンガが描けたのは、長井さんの、わかりやすく、適切な助言があったからでした。

ガロでデビューしてからほどなく、やまだ紫さんにくっついて阿佐ヶ谷のお宅へ、泊めていただいたことがあります。長井さんは、コップで焼酎を水のように、ツイツイのどへ流しこんでいました。そのサマが、とてもカッコがよかったです。香田さんが手早く四、五品のツマミをこしらえて、座敷で、円座を組んで、夜更けまで、いろんなお話を聞きました。BGMには終始、モダーンな音楽が、カセットレコーダーから流れていました。ボクは二十代のころから幽冥界の境を行ったり来りしてるからねえ、いのちを拾って生きているっていうか、まあ、なんかの縁で生かされてんだねえ、今のとこ。ひょうひょうと、でも、ずっしり、臓腑にしみました。

長井さんは、よく、俗世をはなれた仙人にたとえられますが、仙人より、もっとずっとチャーミングなのは、猥談をさらりと語れることです。長井さんの猥談はとても可愛く、悲喜こもごもの実感がともなって、せつなくておかしいものばかりでした。

せつなくておかしい。ひとが生きていくことそのものが、せつなくておかしいのかもしれません。このごろになって、自分をかえりみて、おもいます。

香田さんの一文の、マスクメロンとカステラとシャンパンのとこ、なんだかなんどもなんどもよみかえしました。亡くなるその日、無理やり退院し、自宅のベッドで、マスクメロンやカステラを口にし、お祝いだからいいシャンパンを、と、言った長井さん。とびきりのシャンパンを、ご相伴させてください。ようやく、お酒をおいしそうに飲めるようになりましたから、どうか、一緒に、酔わせてください。

死ぬのはしようがないんだ。生まれて来るときを選べないように、いつだって不意なんだよ。仕様がないんだ、生まれて来たかぎり、いつかは死ぬ。約束だから。そんなふうに、いつか、長井さんは言いました。

誕生が、この世への参入として祝われるのならば、死もまた、あの世への栄転なのかもしれません。さようならは言いません。いってらっしゃい。

送辞に、ネイティヴ・アメリカンの詩を書きます。

今日は死ぬのにもってこいの日だ。
生きているものすべてが、わたしと呼吸を合わせている。
すべての声が、わたしの中で合唱している。
すべての美が、わたしの目の中で休もうとしてやって来た。
あらゆる悪い考えは、わたしから立ち去っていった。
今日は死ぬのにもってこいの日だ。
わたしの土地は、わたしを静かに取り巻いている。
わたしの畑は、もう耕されることはない。
わたしの家は、笑い声に満ちている。
子どもたちは、うちに帰ってきた。
そう、今日は死ぬのにもってこいの日だ。